

アジア研図書館の宝「開発途上国人口センサス・コレクション」紹介

村井 友子

本号で特集「人口センサスからみる東アジアの社会大変動」が組まれたこの機会に、アジア経済研究所（アジア研）図書館の人口センサス・コレクションを紹介したい。

アジア研図書館は開発途上国を中心とした世界一七二カ国の公式統計と五三の国際機関の統計資料約一万三〇〇〇冊で構成される他に比類のないコレクションを所蔵している。このうち人口センサスが中心となる「人口・労働・住居」分野の統計資料は、全体の約二二%（約二万四〇〇〇冊）を占め、その地域別内訳は図1のとおりである。

この統計資料コレクションの礎を築いたのは、一九六四年に研究所内に設置された統計部（その後、統計調査部、統計研究部に名称変更）であった。統計部の統計調査を専門とする研究者と同部に属する統計資料室の職員が連携して、開発途上国と国際機関の統計資料の収集体制を構築し、資料の組織化を図った。一九九八年に統計研究部が廃止された後、統計資料収集事業を図書館が受け継ぎ、今日に至っている。

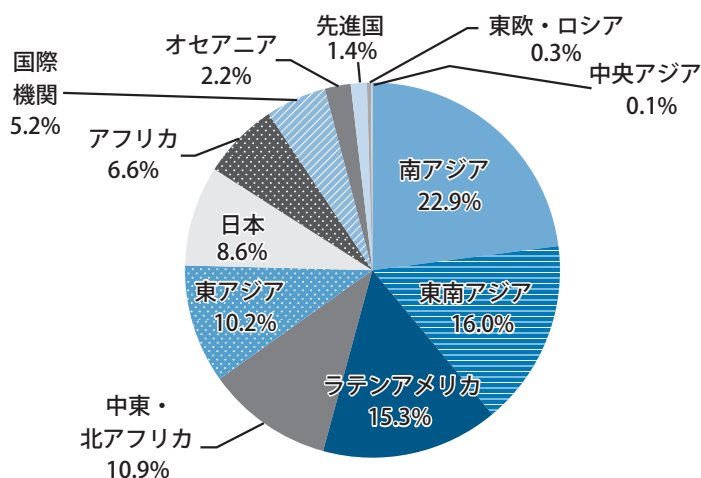
開発途上国の統計資料の多くは、

商業出版物と異なり、販売ルートが確立していない。そのため、日本国内に取扱い書店が存在する中国と韓国の統計資料以外は、図書館の収集担当者が現地の統計局に直接コンタクトを取る方法を主軸にして、収集している。これに加え、図書館職員が資料収集を目的として海外出張したり、海外赴任中または現地調査のため海外出張に出かける研究者に、統計資料を含む現地資料の収集を依頼したりもしている。人口センサスなど、重要な統計資料が、現地で在庫切れとなり、入手不能場合には、国内外の大学図書館や、現地の統計局の図書館に依頼して全文複写を手したり、古い時代の統計資料のマイクロ複製資料を書店から購入したりもしてきた。以上のような努力の結果、アジア研図書館が所蔵する人口センサス・コレクションは、高い網羅性を有している。本稿ではこのなかから、中華人民共和国、インド、ミャンマー、イラン、メキシコの五カ国を選び、その収集状況について報告する。

中華人民共和国——今でこそ、中国は多種多様な統計資料を大量に出

版する「統計大国」となり、アジア研図書館では、中国の統計年鑑類だけでも一七タイトルを継続講読している。しかし、アジア研が創設され、中国研究を開始した一九六〇年から一九八〇年までの二〇年間、中国研究者達は、統計情報を国家機密とみなして秘匿する中国政府に悩まされながら研究を続けなければならなかった。小島麗逸編『中国経済統計・経済法解説』（アジア経済研究所、一九八九年）によると、その背景には、大躍進政策に挫折した中国が、ソ連の経済援助の引き揚げによる経済の大混乱と、その後の

図1 人口・住居・労働関係の統計資料の地域別内訳



（出所）筆者作成。

人口普查一九八二年』は、アジア研図書館が所蔵する最も実施年が古い人口センサスで、全国版と直轄市、省、自治区別の資料編で構成されている。このなかの省別センサスの多くは、刊行当時、中国に赴任していた研究員が吉林大学人口研究所資料室から借り出し、コピーして当時の統計資料室に収蔵したものである。当館では、この第三次から、直近の第六次（二〇一〇年）まで、一九八七年、一九九五年、二〇〇五年に実施された中間センサス（人口の1%抽出センサス）も含め、網羅的に収集して

きた。

近年、中国政府はウェブサイト上での統計情報の公開にも注力しており、中国国家統計局が一九九九年にウェブサイトを開設し、二〇〇八年より国家統計情報データベース「国家数据」を公開している。現在、このデータベースのなかで、第一次から最新の第六次までの人口センサスの基礎データ（全国レベルの総人口、男女別人口、都市人口、農村人口、少数民族人口、文盲人口・率など）が提供されている。その他、第五次（二〇〇〇年）・第六次センサスの全国版もウェブサイト上で公開されているが、市や地区レベルの詳しい集計結果については、冊子体やCD・ROMの省別センサスなどで調べる必要がある、そこに図書館所蔵資料の優位性を見出すことができる。

インド——次に、アジア図書館が誇るインド人口センサス・コレクションを紹介したい。同国は、英国による植民地統治時代から今日まで、センサス事業の長い歴史と伝統を持つ国である。日本で初めて人口センサスが実施されたのが一九二〇年（大正九年）。これに対し、インドの第一次人口センサスはその約半世紀前の一八七一年に実施されている。その後も同国ではセンサスが一〇年に一度定期的に実施されており、直近では二〇一一年に第五次人口センサスが実施されている。アジア図

書館ではこの第一次から第五次までの集計結果を包括的に所蔵しており、第一次については現在も刊行資料を収集中である。

当館では一九〇一年に実施された第四次から第五次まで約四〇〇〇点の冊子体・CD・ROMを所蔵しているほか、第一次（一八七二年）から第九次（一九五一年）については、マイクロフィッシュThe Census of India, 1872-1951, Leiden: IDC, 1987を所蔵している。この四四五八枚のマイクロフィッシュは、ロンドンの大英図書館 (British Library) 内にあるIndia Office Recordsに保存されている英国のインド統治時代に実施されたセンサスの複製資料である。このマイクロ資料から、植民地政府によるセンサス調査が、英国直轄領だけでなく、藩王国にも及び例外地区はあるものの、ほぼ定期的に実施されていたことが窺える。今日のインドの統計システムは、英領インド帝国時代に築かれた統計行政の正の遺産を受け継いでいるといえよう。

インドの人口センサスの特長は、一回毎の資料の刊行点数が多く、関連して刊行される資料がバラエティに富んでいる点にある。インドではセンサスの訪問調査の過程で明らかになった事象を、別途調査報告書として纏めて刊行している。例えば、センサスの調査結果をもとに州政府

が県 (District) ごとに詳細な統計データや地図を編纂して刊行している県別センサスハンドブック District Census Handbook、インドの諸言語に関する言語学的調査報告書 Linguistic survey of India、特定の県に所在する寺院に関する報告書 Census of India 2001 Temples of Tamil Nadu: Kancheepuram District など、多民族国家インドの国情を反映し、多種多様な報告書が刊行されている。これらがフィールドサーベイを行う地域研究者にとって得がたい情報源となることはいうまでもない。一九世紀に実施されたセンサスを含む資料の網羅的収集、そして、内務省が刊行するセンサス資料に留まらない関連資料の包括的収集の裏には、南アジア地域の出版流通・書店・古書店事情に精通し、インドの地方まで広く足を伸ばして精力的な資料収集活動を行ったアジア図書館員の存在があった。

ミャンマー——手堅い統計行政が英領植民地時代から今日まで営まれてきたインドとは対比的に、ミャンマーでは、二〇一四年に、三一年ぶりの人口センサスが実施され、同年八月の暫定報告が、世界を驚かせる結果になった。その理由は、このセンサスで同国の総人口が五一四二万人であることが明らかになり、ミャンマー政府の推計値六〇九八万人を一〇〇万人近く下回っていたから

である。同国は、一九四八年にビルマ連邦として英国から正式な独立を果たしたあと、全国レベルのセンサスを一九七三年と一九八三年に実施しているが、以後三一年間、一九八九年に国名をミャンマー連邦と改名した以降も、センサスを実施してこなかった。

当館では先述の一九七三年センサスについては、センサスの概況報告で附1973 Population census: union volume の「B」資料を所蔵し、一九八三年センサスについては州別センサスを含む集計結果資料1983 Population census 全一八冊を所蔵している。これに加え、一九五三年に都市部で実施された人口住宅センサス First Stage Census 1953 Vol. Population and housing も所蔵している。さらに、ビルマが英領インド帝国の一州であった時代に実施されたセンサスについては、先述の Census of India のマイクロ資料に収録されている第一次（一八七二年）から第七次（一九三一年）の調査結果のなかで報告されている。改めてこのマイクロ資料の資料価値の高さが再認識される。

イラン——イランは、当館では、インドに次ぎ人口センサス資料の所蔵点数が多い国となっている。これまでイランでは、第一次一三三五年（イラン暦、以下同じ）（一九五六年）、第二次一三四五年（一九六六

年)、第三次一三五五年(一九七六年)、第四次一三六五年(一九八六年)、第五次一三七五年(一九九六年)、第六次一三八五年(二〇〇六年)、第七次一三九〇年(二〇一一年)の人口センサスが実施されてきた。このうち、当館は、第二次から第六次のセンサスの集計資料をほぼ網羅的に所蔵している。この網羅的なセンサス資料の収集は、歴代のアジア研究イラン研究者が現地で培ったネットワークを活かし、精力的な資料収集をしてきたことにより実現したものである。なお、第一次については、アジア図書館はNumber and distribution of the inhabitants for Iran and the census provinces や Social and economic characteristics of the inhabitants for Iran and the census provinces など、一部の刊行資料を所蔵している。他方、直近の第七次については、イラン統計局のウェブサイトでセンサス結果のサマリー、調査票、テクニカルレポート等が公開されているが、詳細な結果報告についてはセンサス実施から約四年経過した現在も、未刊行のままとなっている。

イラン人口センサスの所蔵冊数は約一二〇〇冊。このうちペルシャ語表記の資料が全体の約六五%を占めている。センサスの実施回数がさほど多くないにもかかわらず、所蔵冊数が多い理由には、一九九〇年代ま

で、イランのセンサスの集計結果が州(オスターーン)単位ではなく、郡(シャフレスターーン)単位で纏められ、一回のセンサスで一〇〇〜二五〇冊以上の資料が刊行されてきたことがある。当館三階のイランの統計資料コーナーで約六連の書架がペルシャ語資料で埋め尽くされている光景は、壮観である。このペルシャ語の資料の本格的な目録整備は、中東地域を専門とする図書館職員が担当した。イランのセンサスに限らず、アジア図書館が所蔵する人口センサス資料の目録情報は、当館の目録情報データベースのみならず、国立情報学研究所(NII)が提供している日本最大の総合目録・所在情報データベース(Cinii Books)でも提供されている。このデータベースの検索結果から、ペルシャ語の人口センサスを所蔵する図書館が当館以外にほとんど存在しないことがわかる。この貴重なコレクションの形成は、イラン研究者と図書館職員の長年の連携の賜物といえよう。

メキシコ——最後に、ラテンアメリカ地域の大国メキシコの事例に触れ、筆を置きたい。メキシコの統計行政の系譜は一六世紀のスペイン植民地時代まで遡り、メキシコ初の人

誇っている。メキシコの第一次人口住宅センサスCenso general de la República Mexicana: verificado el 20 de octubre de 1895は、一八九五年に実施され、その後一九〇〇年から今年まで一〇年に一度、定期的に実施されてきた。さらに一九九〇年以降は、急速な社会人口学的変化に対応するため、センサスよりも簡易なアンケート調査を情報源とする人口・住宅調査(Censo de Población y vivienda)が実施されるようになった。アジア図書館では、直近に実施された第三次(二〇一〇年実施)センサスを除き、このすべてをほぼ網羅的に所蔵している。第一次から第六次のEstados Unidos Mexicanos Censo de población, 1940から、初期のセンサスはアメリカ議会図書館(Library of Congress)所蔵資料を複製したマイクロフィルムを所蔵しており、それ以降のセンサスについては冊子体またはCD・ROMの形態で所蔵している。当館が第三次人口センサス資料を所蔵していない理由は、メキシコの国立統計地理情報院がこのセンサスの集計結果をウェブサイトで州・市レベルまで公開する方針を打ち出し、冊子体やCD・ROMの刊行を中止したからである。同院は、経済情報バンク(Banco de Información Económica)をウェブサイトで提供しているほか、これまで実施してきたすべての

回次の人口センサス資料を避及的に電子化し、公開している。この政府統計情報のオープンアクセス化は、過去のセンサス結果に留まらず、他の統計調査結果にも及び、最新版のほか、過去分の公開も進んでいる。

この統計情報のオープンアクセス化はメキシコ以外に、ブラジルの地理統計院でも推進されており、当館が所蔵する統計資料の多くが、両機関のウェブサイトで閲覧可能になっている。これまで、送金トラブル、統計局の担当者との音信不通など、書店との取引では考えられないような問題に悩まされながら、統計資料を収集してきた身としては、いささか複雑な思いもある。しかし、世界各国の政府が提供する公式統計のオープンデータ化が、研究情報資源の飛躍的な拡充につながることはいうまでもない。願わくは、世界各国の統計局が、自国で実施されたすべての統計調査結果を公開し、利用者のアクセスの利便性を考慮した形式で提供する時代が早く到来することを祈りたい。その日が来るまで、図書館は冊子体やCD・ROMの統計資料の収集とインターネット上の情報資源の活用をハイブリッド感覚で担っていくことになるだろう。

(むらゐり) ともこ/アジア経済研究書 図書館研究情報整備課長)